

慶應義塾における松本正夫先生

中山 浩二郎

松本先生が奥様の許へ旅立たれてから3か月余が過ぎ去った。先生を偲ぶために中世哲学会の加藤信朗委員長をはじめ諸先生方が、それぞれ中世哲学会とそれに関連する場における先生のお姿を書いて下さるといふ。ついでには「慶應義塾での先生」ということで何か書いて欲しいという、編集委員会からのお願いをいただき、もっと適当な方がいらっしゃるのにと思いつつも、ご葬儀の際弔辞をお捧げしたこともあったのでお引き受けすることにした。とはいふものの果てしなく拡がる先生への思い出を、どこでどう切ったらよいか、なかなか決断がつかず、結局時間切れ間際に筆をとることになってしまった。

松本先生のお名前を私が初めて伺ったのは、1949年3月に慶應義塾大学文学部予科（旧制）を修了する年の春、予科時代に最も興味ある講義をして下さった宮崎友愛先生の許へ、志を同じくする友人三野明君と共に相談に伺った時のことである。焼け野原の三田の山には奇跡的に類焼を免れた「演説館」という歴史的な文化財指定の建物と、鉄筋の建物だったお陰で焼け残った事務棟と三階建ての教室棟があるだけであった。我々予科生は麻布三の橋にあった中央労働学院の校舎を借りたもので講義を受けていたので、三田の様子、つまり進むべき学部での講義内容もどのような先生がいらっしゃるのかも皆目わからなかったから、信頼する宮崎先生がおられる倫理学専攻進学が私たちの希望であった。

ところがM. シェーラーの実質的価値倫理学を専攻されていた宮崎先生は私たちの希望に対して、断固とした口調で「よしなさい。今の塾の倫理学には良い先生がいない。まだ年は若いが哲学専攻に松本正夫という素晴らしい

先生がおられる。二人とも勉強するつもりならその先生の指導を受けなさい。いつも穏やかで笑みを絶やさないこの先生の、ご自分も含めての倫理には良い先生がいないから松本先生のところへ行け、という強いお言葉は痛く私たちの胸を打った。私たちはためらうことなく哲学専攻を志したのである。

4月になり講義の始まる前、現在のガイダンスのようなものが哲学科（哲学・倫理学・美学の3専攻）の先生方の自己紹介という形で行われた。そのとき和服を召して挨拶に立たれたのが松本先生であった。少し前にオートバイの事故でどこかを骨折されたため洋服が着られないからということだったが、その和服姿が福沢ゆずりの着流しだったのか袴を着けられていたのかか思い出せないのは残念である。

講義が始まり、先生は講義では「西洋哲学史Ⅰ、古代・中世」と「形而上学」、他に研究会としての「哲学演習」を担当された。緻密な論理と明晰な口跡、秩序ある展開と一貫した見通しに立つこれら二つの講義は印象的であり、特に「形而上学」の講義はノートもメモもなくチョーク一本を手になされて教壇に立たれ、その前の週の講義のあらましを20分くらい喋ってからその日の本題に入れ、時間終了のベルと共に口を閉じられると、その日の課題が見事に論じられ終わっているのであった。先生の頭の構造はどうなっているのだろうか、私たち学生にとってそれは大きな疑問であった。

また「演習」の方は、トマス・アクィナスの *De ente et essentia* をラテン語で講読されていた。その演習には旧制学部3年でいられた大出さんを初め4～5人の上級生及び東大からみえていた今道友信さん、宮内久光さん方がおられ、その方々の醸し出すピンと張りつめた鋭い知的雰囲気は、のんびり予科での自由な学習に明け暮れていた私たち2人にとってこれが大学なんだという実感を抱かせてくれたのである。奥様が何枚かのざら紙の間にカーボン紙を挟みタイプで打って用意して下さったそのテキストを、先生は『実存と本質について』と題して扱われた。

エンスを敢えて実存と訳された先生の意図は、存在者の存在することの働

き *actus essendi* を意味する「がある存在」すなわち実存と、存在することの様式 *modus essendi* を意味する「である存在」すなわち本質とを明確に区別するところに、実存の優位性を説くアリストテレス・トマスが存在論的伝統の基礎があることを確信されていたからに他ならないと思われる。

それら三つの講義はいずれも厳しく、一言の無駄口もなく進められ、私たち受講者にとって最初から最後まで緊張を強いられるものであった。先生がいかにも勉強されたかは、前夜どんなに遅くなっても翌日の午前4時には起きて書斎にある小さな壇の前でミサを上げられ、それから朝食までを机に向かわれる。また、学校においては夕刻から小泉仰教授の研究室でヘブル語、シリア語、アラム語、ギリシア語を使っての聖書研究に励まれておられた。小泉さんの御話ではこの勉強会は先生が清泉女子大学の副学長になられてからも続けられたという。

「哲学は理論科学である、従って見ることから形成されるテオリアこそ尊重されなければならない」。これが先生の口癖のように出るお言葉であったが、一端講義の場を離れると先生は学校行政にも長けておられ、また座談の名手でもあられた。先生が奥井塾長のもとで常任理事をなさったのは、1956年から1960年までの4年間だったが、この期間は慶應義塾創立百年を祝う記念行事としての新校舎設立の募金事業や、天皇に御出戴いての記念式典があり、また1959年には慶應義塾労働組合が結成される、という多難な年であった。先生はそれらを見事に乗り切られたが、それ以後松本は左翼だという烙印をおされ、それに反撥されてか先生はわざわざ理事を辞められてから労働組合に入会されているのである。それ以来何回となく塾長候補に選出されたが、その烙印が災いしてか遂に実現することなく終わったのは慶應義塾のため惜しまれてならないことであった。

もうひとつの座談の方は、御遺骸の前で最後の祈りを捧げられた柳瀬神父が、若い頃を追想されて「正夫さんには擬悪的なところがあったね」と言われたが、冗談と僻みと親身になって私たち弟子のことを考えて下さることが入り雑ったその座談は、先生にとって大きな慰みの場であったと言えよう。

父上も義理の兄上も高名な法律学者であり、義弟は慶應義塾大学医学部学部長、同病院長も勤められた碩学であり、「幸徳秋水を尊敬し、おまえは社会主義者となれとよく言われたという母上は、一時、姉弟で福沢の家に預けられていたこともあってか、弟小泉信三のことを常に心にかけておられ、あのままでは高山彦九郎となると心配されたというが」（この括弧内は先生のお話及び今村武雄著『小泉信三伝』慶應義塾刊、1987.12.10.参照。なおこの本は昭和58年11月、文藝春秋社刊がある）、著名な親兄弟に囲まれた先生の中で救いの場は、気の合った連中と酒を酌み交わしての馬鹿話であり、更に興に乗ると、亡くなる前の日まで、お見舞いに見えたお孫さんがたを怖がらせて喜んでいられたという「お化けごっこ」であったろう。

信仰上の理由からか、熟読されていたカントと一晚泣き明かして別れを告げたとよく言われていたが、先生の立場を貫徹するためにはカントの意識論的主観主義の克服こそ必須の課題であり、その上で先生御自身の存在論的客観主義の体系を作りあげて生涯のお仕事とされることを望み続けておられたに違いない。

ここに先生の御霊の御平安を祈りつつ、計り知れない御厚恩に心からの感謝の意を捧げるものである。